

ミッシヨナリーとしてのラジャ・ブルック

中島俊郎

はじめに

世紀がまさに二〇世紀に転換しようとしていた、一九世紀が幕を下ろそうとする年に、大英帝国の誇りと威容を検証しようとする叢書がイギリスで出版された。叢書名は「大英帝国の建国者」と謳われている。その対象者には多彩な人士が含まれている。第一巻目から順に巻を追っていくと、『サー・ウォルター・ローリー』西欧を支配したイギリス人、『サー・トマス・メイトランド』地中海の支配者、『ジョン・カボットとセバスチャン・カボット』北アメリカの発見者、『エドワード・ギボン・ウェークフィールド』オーストラリア、ニュージールランドの植民地統轄者、『クライヴ総督』インドの支配者、『サー・スタムフォード・ラッフルズ』極東の支配者』といった、いずれも大英帝国の植民地主義者を代表

する人員構成で編纂されている。そのなかに『ラジャ・ブルック』東アジアの支配者』も含まれているのである。そして各巻頭は、装飾過剰な、ウィリアム・モリスが意匠したケルムスコット活字が唐草模様で飾られ、次のような詩人ジョン・ミルトンの詩句が引用されている――

神よ、汝は、恩寵をもって、この大英帝国を輝かしい存在と化し、そのまわりに属国を配し、国民をすべからく幸福につつまもつた。⁽²⁾

この詩句を読む者は、「恩寵」という言葉に反応して、ジョン・バニヤンが牢獄で思索した神への敬慕を想起しつつ、大英帝国こそが世界そのものである、という想いを抱くであろう。叢書自体が一

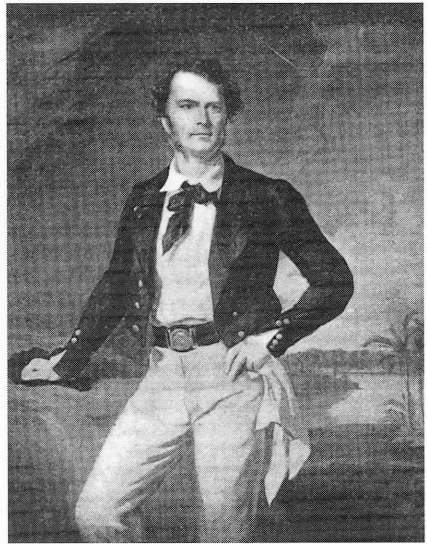


図1 サー・ジェームズ・ブルック

九世紀イギリス帝国主義を雄弁に物語るかたちとなって提示されている。このエピソードは、叢書の構成全体を総括するのにふさわしい。

『ラジャ・ブルック』の著者であるラブアン総督サー・スペンサー・セント・ジョンは、ジェームズ・ブルック（一八〇三—一八六八）の植民地政策の特徴として、「植民地の人々をできるかぎり同等に見なそうとする」点を力説し、ネルソン提督に見られる資質とブルックのそれとを同列におき、高く評価している。^③

両者を比較することの妥当性はともかく、巻頭に添えられたサー・フランシス・グラントが描いたラジャ・ブルックの肖像画^④——荒れ果てた大地を背景に、冒険者に似つかわしい容姿で、強い意志を示す腫と顎、それでいて何かを憂いた表情を浮かべながら遠く

を見つめている姿——を見る限り、大英帝国植民地主義者の理想像がかなり明確に示されてくる（詩人バイロンの肖像画と重ねて見る人も多いであろう。確かに両者に共通点は多い。皮肉にも前者が戦闘中に風径部に傷を負ったように、後者は跛足であったという身体的点まで似ている^⑤）。〈冒険者／植民地支配者〉という同心円は、同時代の〈冒険者／ミッシヨナリー〉であるリヴィングストンなどにも合致する構図であろう^⑥。そしてこの同心円は、また日本の南進論においても、いささか形態を変えて、重層化されていくのである。

1 ジェームズ・ブルックのサラワク統轄とミッシヨナリー

一五二二年、ヨーロッパ人としてスペイン人が初めてボルネオの大地に足を踏み入れたが、ここでは、イギリス人に限定し、論を進めていきたい。それは一七世紀初頭、ヘンリー・ミドルトン（一六一三年没）を嚆矢とするが、一七〇二年、東インド会社の商館をブルネイに設立するまで両国の関係に顕著な進展はみられなかった。そのひとつの理由として、イギリス人の現地人に対する尊大な態度もさることながら、それまでに現地人が信仰していたイスラム教とキリスト教の対立を忘れてはならない^⑦。そうした膠着状態に風穴を開ける人物が出現した。イバン族を奴隷のように従属させていたマレー人、中国人の蛮行（海賊行為も含む）の前にひとりのイギリス

人が立ちはだかったのである。

ジェームズ・ブルックこそ大英帝国を象徴するアイコンそのものであった。大洋を棲家として、冒険心に富み、異国趣味にうったえ、海賊と交戦して退け、白人としては初めてアジアに王国を築くという、まさに帝国主義⁽⁸⁾＝オリエンタリズムの理想を一身に具現化した存在であった。大英帝国の威信を植民地というディスコースのうえで明瞭に示してくれたのである。正義、キリスト教、イギリス重商主義が存在するところには、平和は必ず約束される、という信念に裏打ちされていたのである。

だが、サー・ジェームズ・ブルックのような伝説化された対象こそ、伝説の厚いヴェールにつつまれ、無数の逸話が増殖し、その本質は奥深く隠蔽されてしまい、実像を理解しがたいのである。ジョゼフ・コンラッドの海洋小説『ロード・ジム』の主人公に擬せられたこと、チャールズ・キングズリーが愛国的冒険小説『西へ向かえ』の献辞をラジャに呈したこと、⁽⁹⁾ジェームズを主人公にして翻案・創作された数限りない小説群、その業績をたたえる詩歌、聖人化された少年向け英雄伝、そして映画などにも言及したい誘惑にここでもかられる。⁽¹⁰⁾だが、いくら虚像を追求してみたところで実像は姿を現さない。

本論ではミッシヨナリー活動を介在させたサラワク政策を考えていき、矛盾に満ちた、ヴィクトリア朝植民地政策に翻弄されたラジ

ャ・ブルックの実像に迫りたい。

一八四一年（天保一二年）九月二十四日、ジェームズ・ブルックは、ブルネイ統括下におけるサラワク州ラジャになる。感情の高まりを抑えた日記の記述に、逆にジェームズの心情が飲びとなって伝わってくる。

ラジャという称号が宣言され、サラワク州総督に任ぜられた。号砲が響き、川岸、停泊中の船から祝福の旗が無数に振られていた。⁽¹¹⁾

サラワク独立後、この称号はブルック家が三代にわたり世襲することになり、ホワイト・ラジャの異名で一世紀にわたりサラワクを統轄していくのである。

ジェームズは通商、納税に関する八ヶ条にわたっての統治策を布告し、「イバン族の救済」、「海賊の討伐」、「首狩りの禁止」をサラワクの統治原理とした。だが、この綱領をみてもわかるようにキリスト教については何ら言及していない。布告の趣旨は現地先住民の洗脳にあるというのはい目瞭然である。彼が悪習として矯正しようとした、イバン族の首狩り儀式についても、キリスト教の見解からすれば残忍きわる行為に映るが、視点を変えてみるならば、豊饒を祈るアニミズム宗教とも考えることができる。⁽¹²⁾切断された首は、

死者への哀悼と同時に、再生の祈りを表わすものでもあるのだ。首狩りの行為自体がもたらす豊饒な大地の恵みがイバン族には重要なのである。断首という儀式がもたらすハレの豊饒性を無視し、キリスト教だけを基準として、それを非文明的な悪習とみなしてしまう、優位に立つ視点こそ問い直されるべきではないのか。イバン族の首狩りは、J・フレーザー『金枝篇』（一八九〇、一九一―一九三六）、T・S・エリオット『荒地』（一九二二）などに同一テーマとみられる再生を願う象徴行為と本質は変わらないのである。

これまでラジャ・ブルックとキリスト教をテーマとした研究書は、グラハム・ソーンダーズ『主教とラジャ・ブルック―サラワク（一八四八―一九四一）における英国国教会ミッシヨナリーとラジャ・ブルック―』（一九九二）以外に公刊されていないのではなからうか。ソーンダーズが指摘するように、ラジャ・ブルックは、英国国教会を前面に押し出してサラワクの統轄を推進していかなかったが、キリスト教を意識的に政策手段として積極的に実行したことは否定できない。

事実関係から明らかにしていこう。英国国教会に懇願し、宣教師とその家族をサラワクに招いたのは、ジェームズ・ブルック自身であった。⁽¹³⁾ 彼はサラワクに伝道、布教の必要性を感じていた。⁽¹⁴⁾ というのも彼の活動をヴィクトリア朝社会に浸透していたキリスト教教義が直接的に支持したのである。イギリス本国では福音主義が再び台

頭していたという現実があったからだ。当時のヴィクトリア朝社会にあって福音主義の勢力は絶大であった。がその勢力の側面には功利主義が厳然として寄り添っていたという事実を無視してはならない。つまり福音主義は、勃興してきた中産階級の価値観を映す鏡であり、同時に自らの信仰と経済を折衷させる格好の枠組となりえたのである。その上、福音主義はプロテスタントの敬虔さを教義の支柱としているが、教理、礼拝といった形式主義に傾かず、より個人生活に密着し、直結した宗教であったといえよう。⁽¹⁵⁾ 後述する福音主義者アンジェラ・バーデット・クーツの博愛主義も福音主義のひとつの変奏と考えれば理解しやすいであろう。

福音主義の文脈のなかで、ジェームズはサラワク住民に対するキリスト教伝道の必要性を痛感するのである。サラワクには彼が到来する以前からサラワク・ミッシヨンが存在していたが、「福音伝導協会」(SPG)の支援をうけ、一八四六年、ボルネオ・チャーチ・ミッシヨン・インスティテューション(BCMI)が設立される。⁽¹⁶⁾

ジェームズ自身が告白しているが、表面的な言動をみる限り、先住民には独自の生活・信仰があると信じていたかもしれない。だが本心からそのように信じてはいなかったようだ。どうしてもサラワク文化とヨーロッパ文明を比較してしまうからだ。彼はラジャとしてサラワクを統轄する際、フランス・マクドゥーガル師を招聘し、



図2 フランシス・マクドゥーガル師

ラジャ公舎の裏山に教会を建造している。

マクドゥーガル師は、一八四八年六月二九日、妻ヘンリエッタ、息子ハリーたちと、喜望峰を経由し、半年かけてサラワクへ到着した。ヘンリエッタは、期せずしてサラワクに足を踏み入れ、ミッシヨナリー活動にほぼ二五年間、心身をささげた女性となった。彼女の日記と書簡をもとにして書かれた『サラワクから息子への手紙』(一八五四)、『サラワクの日常素描』(一八八二)は、東洋における

キリスト教浸透の過程を活写している。両書に窺われるサラワクの生活は過酷そのもので、夫妻は子供をほとんど失うことになる。夫は熟練の産科医であったにもかかわらず、熱帯の気候はその犠牲を強いたのである。大英博物館の職をうち捨て、彼をサラワクに駆り

立てたものは何であったのか。それは数々の蛮行に苦しむサラワク住民を救いたい一念であった。この一点でブルックとは固く結ばれていたのである。二代目ラジャ位継承問題で彼は、ラジャに対してこれまでになく懷疑的―「不正という悪夢」

と彼は表現している―になるが、イギリス本国の国会でジェームズ・ブルックの残虐行為が問題視された時(一八八七年七月)、私憤を挟まず、ウィリアム・グラッドストンが「恥ずべき行為」とした、ブルックに嫌疑がかかった中国人惨殺事件に関して下院の場で彼を弁護したのであった。⁽¹⁷⁾

祖母が敬虔なクリスチャンであったが、ブルック自身、確固たる宗教観はもたなかったにせよ、キリスト教が説く、神の「真理」を示すことで、先住民を改宗させ、高度な文明社会を建設できると確信していた。キリスト教をサラワクに布教しようとした最大の理由は、先住民の洗脳、教化を考えていたからである。ただそれは純粹な教化政策ではない。一八四一年一月、心を許した友であり、書簡集の編纂者であるジョン・テンブラーに宛てた書簡にラジャ・ブルックの宗教観を如実に垣間見ることができる。

……この群島の進展に乗じて商業をすすめていき、さらにキリスト教をより広く布教していこうと考えている。⁽¹⁸⁾

ラジャのこの言葉こそミッシヨナリー活動と経済政策が同一の軌道にのり、並行しつつ走っている事実を示すものに他ならない。ジェームズ・ブルックのミッシヨナリー活動を考える上で忘れてはならないのは、アンジェラ・バーデット・クーツ(バーデット・



図3 アンジェラ・バーデット・クーツ

クーツ男爵夫人との交友である。¹⁹彼女は、セント・ジェームズ・スクエアにある、銀行家の父トマス・クーツの邸宅で社交の場を開き、著名な政治家、科学者、文学者などと文化サロンをつくつていた。とりわけチャールズ・ディケンズ、ウェリントン公爵、そしてジェームズ・ブルックは、サロンの主賓であつた。いつの時代もサロンは新しい時代精神を統合、発揚する場である。ただこのサロンの創始者は、まだ年端もいかにないのに四〇歳年長のウェリントン公爵に求愛し、結局、後年に四〇歳年下の男性と結婚するといった、いささかエキセントリックな面をもつ、ヴィクトリア朝を代表する博愛主義者でもあつた（ある時期にはジェームズ・ブルックを将来の夫にと夢想していたようだ）²⁰。

一八四一年九月二四日、ヴィクトリア女王にジェームズは謁見の栄

を賜るが、その時にバーデット・クーツと初めて出会うのである。ステイーヴン・ランシマンも指摘しているように、ブルックにとってこの時期が生涯の絶頂期であつた。ロンドン市長からは公民権、オックスフォード大学からは法学博士の学位、加えてイギリス政府からはバルネオ総督兼総領事に任命され、バス勲章を授けられたのであつた。²¹

しかしその後、ジェームズは、イギリス政府の要請によりイバン族の海賊討伐を行うが、罪のない民間人まで殺戮したと下院で糾弾される事態に陥つた。²²さらに、一八五七年二月一八、一九両日に断行した中国人鎮圧に対する残虐行為を国会で再び指弾され、精神的打撃を受ける。²³そうした窮地に立たされた時、精神的支柱となつてくれたのがアンジェラ・バーデット・クーツその人であつた。彼女は、財産のみならず生命までサラワク住民のために捧げるラジャの姿に感銘を受け、数々の援助の手をさしのべるのであつた。一八五九年、サラワクの国内政権安定のためにジェームズに五〇〇〇ポンドを贈り、次に重装備な武器をそなえた船レインボー号を寄贈し、まさに物心両面で彼を支援したのである。さらに一八六一年一月三〇日、サラワクを自ら訪問し、ジェームズを激励、鼓舞している。こうした無償の行為が触媒となりブルックは、自らの中に宿つていたミッショナリー精神を大いに喚起されたはずである。²⁴

クーツは単に寄付行為のみしてはいたわけではない。と言うより、サ

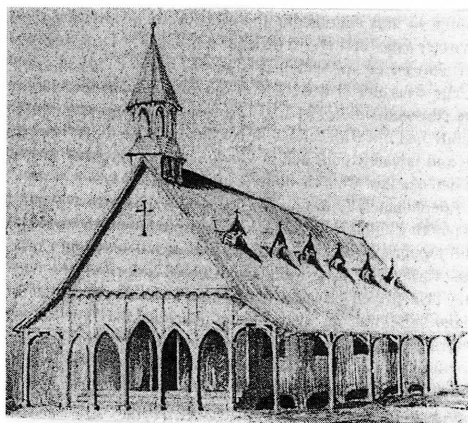


図4 マクドゥーガル師設計の聖トマス教会

ラワク政策に直接関与しようとした。例えば、サラワクに実験農場を開拓し、イバン族に新しい農業の方法を教えよう、と積極的にブルックに提言しているほどである。そうした農業法を導入することでサラワクの経済的安定と、ミッシヨンの独立した立場の確立を考えていた。⁽²⁶⁾

一八六一年二月二五日、バーデット・クーツ男爵夫人に宛てたジェームズの書簡には、「疲労困憊だ。もう安らかに死の床につきたい」とまで記され、ラジャ・ブルックは彼女に苦しい胸のうちを告白し、慰謝を求めている。晩年（一八六七年二月）、ジェームズはクーツの住居に仮寓するが、その家は心安らぐ家庭へと変貌をとげるほど精神的慰安の場となり、まさに彼女はラジャの守護天使であつ

た。それ故、一時、ジェームズはサラワクのラジャ継承者としてバーデット・クーツを指名しようとしたほどである。⁽²⁷⁾

数多くの教会、学校、公共施設などを生涯にわたり建造、寄付しつづけた博愛主義者は、ジェームズ・ブルックのサラワクに対する無私の心に感動し、支援をつづけたのである。⁽²⁸⁾ 先に述べたように、こうした一連の慈善行為から、ラジャの心のなかでわだかまって、世俗の統治者としての立場との折り合いを求め、葛藤を繰り返していたミッシヨナリーとしての使命感が幾度となく胎動する契機となつたと考えても不自然ではなからう。⁽²⁹⁾ 浩瀚な往復書簡集を編纂したオーエン・ラッターは、アンジェラ・バーデッド・クーツをサラワクとラジャに対する「倦むことを知らない最大の支援者」⁽³⁰⁾と称賛してやまない。

ジェームズとサラワクに同行してきたマクドゥーガル師の場合、クーツとはまったく反対の結果に終わってしまったのは皮肉なことであつた。最大の原因は後継者問題にあつたというが、甥ブルック・ブルック（ジョン・ブルック・ジョンソン 一八二三―六八）をめぐる一挙に両者の間には断絶が生じたのである。とはいえ師からラジャに向けられた敵意の矢はそれほどサラワク政策に影を落としていない。

ジェームズをうちから突き動かしていた最大の動機は、サラワクの平和、つまり海賊を討伐しサラワク先住民の自由を確保し各種族

を平等視して、住民同士が闘争を繰り返さないことを切に祈っていた、と言つてよい。確かに彼の野心は、ヨーロッパ文明を最大限に利用して優位に立ち、大英帝国の東洋への拡張・伸展を図ることにあった、ということも決して否定できない。だからジェームズ・ブルックは大英帝国の重商主義を推進していく過渡期の為政者と位置づけてよいのではないか。

2 チャールズ・ブルックのサラワク政策

ジェームズの甥チャールズ・ブルック（一八二九—一九一七）は、ジェームズよりも海賊、先住民に対して好戦的に挑んだ^①。彼の人生は、内乱の連続で、しかも自ら志願、指揮をとっている。一八五二年、サラワクに到着すると、すぐにスクラン川の反乱軍討伐に加わった。戦法は、ジェームズよりもはるかに長けていて、残忍きわまりないものであった。能率的にイバン族を徴兵したうえ、マレー人傭兵も加えて兵力を増強した。ベトナム戦争時、アメリカ軍がベトナム人民家屋を焼き払ったように、彼はイバン族の住居ロング・ハウスに火を放ち、住民を壊滅に近い状態に陥れたのである。

チャールズの戦術に批難が集中するのは当然であった。しかし彼は武力しか信じない筋金入りの軍人である。ジェームズには人間に對する情愛があつたが、チャールズは人を近づけない冷徹な一面をそなえていた。逆に言えば、その性格上の厳格さ・非情さが、サラ

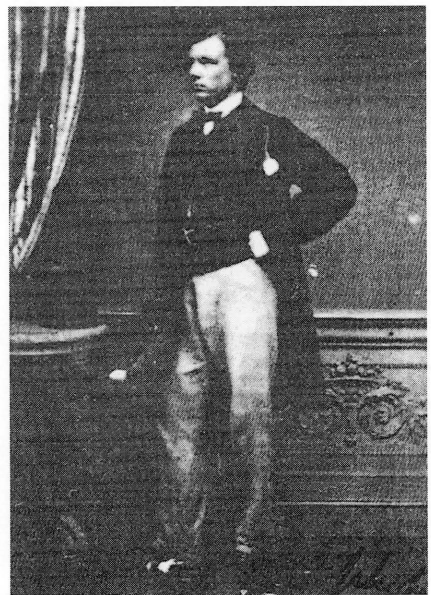


図5 サー・チャールズ・ブルック

ワクをより安定させ、より有利に中期政權を維持できた、という見解はうがち過ぎているであらうか。

一八六八年八月三日に第二代ラジャに即位したが、住民の宗教、權利の尊重を先ずうたった。またイスラム教徒の個人的自由を保障したのである。内乱とはちがい、外交ではオランダと二度ばかり小さな戦いがあつただけで、内政をより強化し、長期にわたる安定政權の樹立につなげていったのである。

さらにチャールズはイギリス本国とサラワクの關係をかなり伸展させた。ブルネイ貿易促進には全面的な賛同を得られなかったが、外務大臣ダービー伯爵エドワード・ヘンリー・スタンリー（一八二六—一九三）、植民相ヘンリー・ジョージ・グレー（一八〇三—一九四）も彼のサラワク政策に賛同してくれた。その結果、一八八八年六月

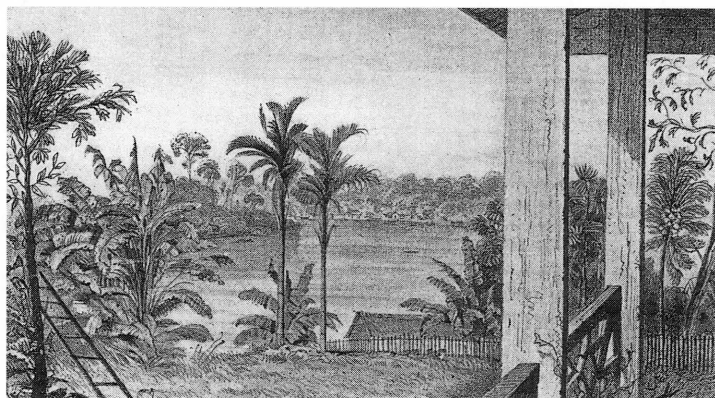


図6 ラジャ公舎からの眺望

一四日、イギリス政府との間で保護条約を締結するに至ったのである。イギリス政府がチャールズを英国保護下にある独立国家の元首と認めたことは、サラワクの内政に本国が干渉しないことを意味していた。サラワクは独立国家として認められたため、その結果として、国内が安定し、そして住民産業の開発に重点をおいたため、先住民の安全、幸福が以前にもまして守られるようになったのは言うまでもない。

未開同然であった土地に、配水路の整備と水資源の供給、鉄道の敷設、そして無線電信の設置まで実現し、住民生活の利便性は飛躍的に高まったのである。彼の言葉を借りれば、「文明化」したと言える。国土を買収し、初代ラジャの国土面積と比較すると、ほぼ二倍にも拡張したのであった。

専制政治の実践者が宗教を軽視するのは当然かもしれない。よって、ロバート・プリングルが指摘しているように、チャールズはキリスト教への改宗により先住民の生活が一変することなどありえない、と現実的に見ていたようだ。⁽³²⁾ それどころかキリスト教は、異教徒に精神的な安定を与えるだろうが、実生活の経済活動になんら資するところがないであろう、と憶測した。それ故、イバン族の伝統的な生活を安定化させていく政策がイバン族にとっても最良の選択であると考えたのである。とは言え、世界規模でゴム栽培が投機対象として関心を惹くさなか、チャールズは、米作を顧みず、ゴム投機に走る農民を放置したままで、警告を発し、善処、指導を図ろうとさえしなかった。

チャールズと同じく、戦争でほぼ人生の大半を過ごした三代目ラジャの時代になるとミッシヨナリー活動は、医療行為や教育活動などだけに限定・制約されていく。次章ではサラワクでのミッシヨナリー活動が、日本軍政下の収容所という、過酷な制約を強いられた空間で、いかに実践されていたか、検討してみよう。

3 日本軍収容所におけるミッシヨナリー活動

ミッシヨナリーが東アジア先住民にキリスト教を、いかに布教していったか、という問題について具体的に書かれた記録・文献はそれほど多くない。サンギル島で布教にあたったひとりのドイツ人宣



図7 『植民』(昭和4年4月号)表紙

教師の活動記録⁽³³⁾は、その意味で注目しよう。

島民から宣教師は異教徒とみなされ、幾度となく迫害を受け、生命を危険にさらすことさえあった。だが、彼は「ひたすらに隠忍自重して、殉教的覚悟を以って、やがては彼の理想に近い生活に恵まれるであろうことを楽しみに奮闘をつづけ」た、のであった。にもかかわらず、島民の胸には、彼が説く「勤勉」「力行」の教えも全く「無欲恬淡」に映り、うつろにしか響いてこない。うすら笑いを浮かべるだけで、教えに耳を傾けようともしない現実を目の当たりにし、彼は、「範を垂れることの捷徑」を思いつき、実行していく。それは、椰子とニクヅクの樹を、等間隔に植樹し、日光と通風に考慮しながら植林していく方法であった。排水の便、運搬の便なども忘れずに一区画を独力で開拓していったのであった。当初、島民

は、無駄な空地に多く植樹しない、その不経済さを嘲笑していた。数年間の歳月が流れた。宣教師が実践した「果粒が巨大で、数が多い」結果をもたらす植樹法は、島民には驚異と映ったのである。多神信仰の島民は、キリスト教受容にもさほど抵抗がない。「信ずれば与えられん」という聖句を鵜呑みにし、キリスト教徒になりさえすれば、遊んでいても食べさせてもらえると、功利的観点から勝手に信じ込み、洗礼を受け、幾日も全く働こうとせず、寝たままに神の「示願」をまつのみ。その結果、「こんな空腹を強いられ、ひどい思いをする宗旨は真つ平御免だ」と破戒者が続出した、という事実もある。

だが、ひとりのドイツ人宣教師のひたむきな献身に、島民は教化されていく。だから「宣教師の島民に対する威望と勢力とは偉大である」。それゆえ「ラジャの支配よりもはるかに権威づけられていた」⁽³⁴⁾と指摘しても過言ではない。労働は、神への奉仕につながり、苦熱をおそれず、仕事にいそしむようになったという。こうした島民の変化は、宗教の感化力に「俟つものの多かったこと」⁽³⁵⁾は拒みがない事実なのである。

次にミッショナリー活動が戦時下における過酷な状況のもと、どのように展開されたか、考えていこう。

バルネオでの日本軍による侵略・占領と連合軍の再支配については、説明されていないことが多い。⁽³⁶⁾とりわけ日本軍がどのように現

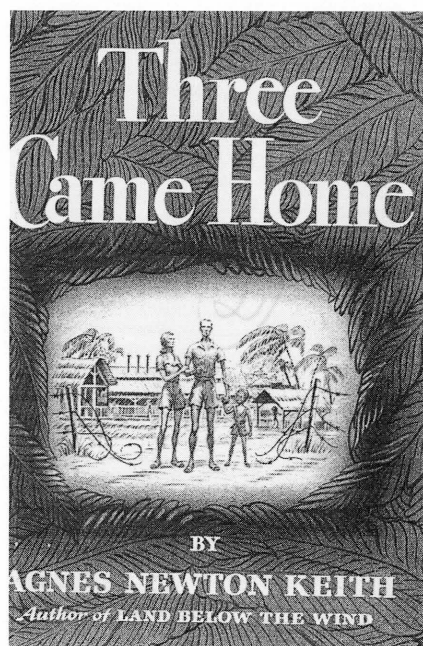


図8 『三人は帰った』表紙

地を支配したのか、という事実はヴェールにつつまれたままである。ただ、判明していることは、侵攻してくる日本軍に対してボルネオ連合軍は、まるで戦争をひとつの劇であるかのように考えていたのではないか、と疑われても仕方がない対応をしたということである。予想された悲劇はクリスマス前、クチンで現実となった。すでにクチン郊外では二週間前に日本軍による空襲が続いたにもかかわらず、対応すら考えていなかったのであろうか。日本人はアジアの同志であるがゆえに、爆撃してくることなどありえないと夢想している者までいたという。「サラワクの防衛体制は、見るに堪えない。前方が難攻不落であるにもかかわらず、後方は全く無防備で易々と日本軍を招き入れるような状態だ」と『タイムズ』紙(ロンドン)が嘆いたほどである。この記事が発表されて一ヶ月もしないうちに、最

大の防御壁となっていたオランダ軍がいとも簡単に降伏したのもゆえなしとしない。

ボルネオは日本軍の命運を握っている地である。無尽蔵にある石油資源が日本の生命線であった。それだけに両者の攻防はすさまじい。ただ、背水の陣をひく日本軍が、樂觀視していたボルネオ連合軍よりも士気が上であったのは言うまでもない。

戦争がサラワクにもたらした最大の惨劇は、文明化されつつあったイバン族を旧習へ強いてもどしたことであろう。首狩りを再び行い出したイバン族もあった。しかし、ロング・ハウスにもどり、イバン族の文化伝統は維持されたという見解は、植民地主義者の眼差し以外の何ものでもなからう。

一九四三年七月七日、東条英機が占領地クチンに降り立った時、日本軍はサラワクを完全に支配下に収めたのである。戦局は日本に不利になりつつあったとはいえ、収容所には二千名以上の欧米人が収監されていたのであった。むしろ宣教師として例外ではなかったのである。

文学作品を史料として用いるか、否か、についてはまだ大いに議論がある⁽³⁶⁾。だが本論ではあえて傍証として援用したい。と言うのも、多少の潤色があるにせよ、捕虜収容所の実態、とりわけミッシヨナリー活動についての記述は、きわめて信憑性が高いからである。

アグネス・キース『三人は帰った』(一九四七)は、アメリカ人

の妻、イギリス人の夫そして二歳の男の子が、ある日、突然、日本軍によりクチン強制収容所に収監され、隔離された上、過酷な日々を強いられた記録である。作者は、「この本に取りあげられる日本人は、神の造りたもうた人間ではなくして、戦争が造った人間である⁽³⁹⁾」という、自分たちもそうした日本人側に将来いつなるかも知れない、と自戒をこめて語り出す。この冒頭部分は、いつ自らが加害者側に加担してしまうか、わからないという人間的な心情を余すところなく伝えていて印象深い。

地獄のような日々の生活のなかで、主人公が砂漠における慈雨のような体験をする場面がある。その場が尼僧とともに共有する空間・時間であるのは傾聴に値する。

サンダカン修道院のローマン・カソリック派のシスターが三人わたりと一緒でベルハラに収容されていた。マザー・ローズ尼院長、フランス・メリー尼、クリスタニの三人で、屋根裏部屋の一隅にかたまっていた。そこには聖壇があり、十字架があり、そして、衛兵の許可を得て鉄条網の外で摘んだ赤いムクゲの花で飾った聖母とその子キリストの像があった。この聖母と幼な児の前では、神経質な子供たちと疲れ切った母親はいつも快く迎えられる。やんちゃな赤ん坊や疲れた母親たちにとって、ここは安息と愉悅の場所だった。この十字架の足もと

こそ、やさしい尼僧たちの配慮も手伝って収容所の中で一番平和に充ちた場所だった。⁽⁴⁰⁾

主人公は、どのような過酷な場に身を置こうとも、つねに冷静さを失わない超然とした尼僧の態度に感銘を受け、尼僧が神の化身とさえ思えてくるのであった。

俘虜生活を通じての最良の経験を、わたしはこのクチンの収容所でした。それはローマン・カソリック教会の尼さんたちと親しく接触する機会を得たことであつた。わたしはこれまでベルハラ島にいた三人の尼さん、ローズ尼院長とクリスタニ、それにフランス・メリーを通じてわずかに聞き知る以外に、尼さんの生活については全然知らなかった。この三人は白い衣を着け、低い声で話し合い、われわれ俗人とは全然かけ離れた、神の啓示を受けた人たちであり、殆んど人間らしさというものを感⁽⁴¹⁾じさせなかった。

だが、尼僧も収監されている収容者の一員にかわりはない。だからある面ではまったく逆の姿を見せる時があつた。

女子収容者全員の責任者は、バーナーデイン尼院長と云って、



図9 捕虜収容所全景（著者スケッチ）

クチンの尼僧院から来た、ひよわな、浮世離れのしたイギリス人の尼僧だった。この頃、日本側当局は、俗人のグループの代表と交渉することをいやがった。尼僧たちは統制がとれていて訓練も行き届いていた。そして、少なくとも表面では、いつまでもたっても諦めをつけないわしたちよりもはるかに柔順で、唯々諾々と日本軍の命令に従っていた。⁽¹⁴⁾

主人公と日本兵たちとの間で交わされる、戦争と人類愛の議論は、サラワクとイギリスの関係に酷似している。ここには相対的な思考など微塵もない。勝者と敗者があるのみだ。

「戦争前、イギリス人は何かという人類愛を口にした。自分たちのことを人道主義的な人種だという。他の人種は皆そうじゃない。そして自分たちだけはいつも、慈悲だ、仁愛だと云う。が、今じゃ人類愛なんてどこにあるんだ。日本人なら絶対にしないひどいことをする——日本人は人道的だ。親切なのは日本人だけだ。非常に人道的だ。人道的に善意にもとづいて行動する。イギリス人も今度はわかっただろう。イギリス人なんてだめだ。口先ばかりだ」と同じ意味のことを皆が口を揃えて繰り返した。⁽¹⁵⁾

日本軍は、懲罰と称し、捕虜全員に残虐行為を強制的に見せつけようとする。しかも犠牲者は全員の前に晒されたまま、放置されるのである。古来より繰り返されてきたキリスト教弾圧を想起させるのに十分な描写である。「犬でさえ苦痛を受ければ身を隠すことができる」というのに、と主人公は憤慨しながらも、いかにキリスト教精神が心の支えになっているか、共感をこめ、認識し、日本軍の仕打ちを弾劾している。

こんな場合、犠牲者が気弱な真似をしたり、勇氣や威厳を失った態度を示すのを、私は一度も見たことがない。虐待を見る度に、私は十字架の上で迫害に堪えたキリストのことを考える。恥辱を受けたのはキリストではなくして迫害者の方なのだ。勇敢に迫害に堪えている男の人たちを見ながら、私はこう考えた。この人たちの本当の恥辱は、この人たちが迫害者とその位置を代えた時に始めて生じるのだと。⁽⁴⁵⁾

また同時に、主人公はこのような言葉も明言している——「残虐性ということが日本人のみに限られた性質でないと同じように、慈悲心ということもまた、われわれアメリカ人の専売特許ではない」と。そして戦争の無意味さが、主人公の胸のなから「戦争は勝者をも敗者をも捕虜にする」⁽⁴⁶⁾という実感をともないこみあげてくるのであった。

主人公は戦争について思索をつづけ、持てる者と持たざる者が平等・対等になることは不可能だ、と結論をくだす。戦争を誘引する原因のひとつに経済活動がある、と冷静に指摘しているのだ。

この大陸で、われわれが必要とする以上の物を持っているのに、地球の向う側では、ほかの者が飢えて死ぬような状態が

づいている限り、そこには、恒久平和はあり得ない。⁽⁴⁶⁾

この作品のなかでスガ大佐という、捕虜收容所の指揮官である日本人将校が登場する。⁽⁴⁷⁾彼は、ワシントン大学の卒業生であり、皇国日本の賛美者、いや狂信者と言っていいだろう。と同時に、東洋人と西欧人の相互理解という理想を胸に秘めた理想主義者でもあった。だが戦局は個人の想いなど無視して止まるはずはない。ラジャ・ブルックの、理想と現実が拮抗するサラワク政策をここで重ねてみるのも無意味ではあるまい。

4 日沙商会とサラワク政庁

サラワクは、君主政体であるとともに、穏健な専制政治でもって統治されてきた。それでも、三代目ラジャ・ヴァイナー・ブルック（一八七四—一九七二）の治世も戦争・内乱の連続であった。その上にこれまでにない外圧がサラワクを襲うこととなる。言うまでもなく第二次世界大戦の勃発である。サラワクと日本の関係がもともと緊密になり、また疎遠になる時期でもあった。

太平洋戦争下、日本海軍の軍属として日本基督教団から多くの牧師たちが南方、南洋諸島に向けて派遣されていた。つまり一九三九年に公布された国民徴用令は、神に心身を捧げる聖職者とても例外ではなかったのである。それどころか、同年には宗教団体法も発

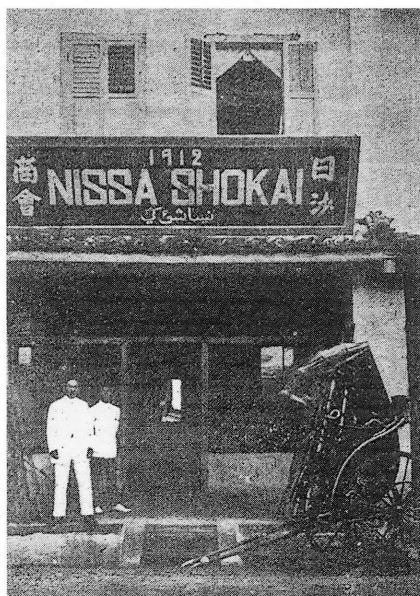


図 10 日沙商會

令され、宗教統制が強化されたのである。天皇を神格化し、戦意をさらに高揚させようとする軍部の大東亜共栄圏の思想を後ろ楯にして聖戦への参加を余儀なくされたのであった。むろん南方資源を渴望する、切迫した事情があったにせよ、サラワクのキリスト教会にどのような圧迫、関与があったのか、ラジャ・ブルック政権との関連において考えてみたい。

例えばインドネシアでは日本人牧師によるキリスト教奉仕団が結成され、綱領までもが制定されている。⁽⁴⁸⁾ その項目をしてみる時、おのずと帝国意識が顕現してくる。項目には、大日本帝国の国策を支持するため聖戦勝利に向け自発的に行動を起こすこと、大東亜共栄圏の理想具現化のためキリスト教徒を善導すること、皇軍の支援のため自発的な行動をすることなどといった、軍政と密接にかかわる

ことが明言されている。それだけではない。現地の聖職者たちに日本人独自のキリスト教観を押しつけようとなえていたのである。

牧師による牧師の再教育は、まさに初代ラジャがもくろんだ政策にほかならない。ここにジェームズ・ブルックからヴァイナー・ブルックまで百年間、なんら揺るぐことなく営々と続いたミッシヨナリー活動の衣をかぶった植民地政策の本質がある。戦時下であるがゆえに、また閉塞され、自由を奪われた状況下にあるがゆえに、より鮮明な私たちとなつてその本質は抉り出されるはずだ。

『外地におけるレディ・ミッシヨナリーの任務』(一九一〇)には、活動を実践するには、説教師、翻訳者、教師、現地の牧師、印刷業者、伝道師、そして手足となってくれる職人などが不可欠な存在である、と解説されている。⁽⁴⁹⁾ キリスト教教義を浸透させるには経済活動が不可欠であり、これがあつてはじめて、教義を実践にうつせるというわけである。そのことは両活動・政策の雁行を意味する。経済政策と連動しているミッシヨナリー活動をここで検討しておくのも無駄ではあるまい。

明治期の南進論者を代表する、国粋主義者である地理学者、志賀重昂が大正七年(一九一八)に発表した、マリアナ諸島を含む三諸島統轄に関する論文⁽⁵⁰⁾には、「邦人の南洋発展策の前哨」、「太平洋上における平和の保障」、「将来における海洋開拓のステーション」などの主張が強調されている。この提唱の「発展」、「平和」、「開拓」

という美名の陰に、経済的要因が根をおろしている。逆に経済政策を実行に移すためこのような主張策を打ち出したのではあるまいか、と思えてくる。事実、その経済政策を現実化していくため、三項目の方策を具体的に呼号するのである――

一、教師を増発して、唯是れ日本語の普及を計ること。

二、日本の官庁の政策を莊嚴にする事。

三、土人の負担を軽減すべき事。

第三項には、補注として「土人より租税を徴収するなど云ふ小頭脳が元来の誤なり、其の納税額を剩したりとて何種の金額となるや」と有体に真意を吐露してしまっている。つまり、ラジャのミッショナリー政策となんら変わらず、そして「キリスト教奉仕団の綱領」とも大差はない。この時期におけるキリスト教政策は宣撫工作の一政策と考えても誤りではなからう。では、民間のサラワクに対する動向はどの様なかたちで、認識され、推進されていたのであろうか。

大正四年（一九一五）に『邦人新発展地としての北ボルネオ』という本が出版された。著者は、現地を視察した三穂五郎。「南洋に関する本は近来雨後の筍のように出たが、その一部にして、しかも双手を挙げて邦人の移民発展を歓迎する北ボルネオに関するのは、

余の寡聞の故か知らないが、雨夜の星のように見えない。そこでここに余が最近同地方を踏査したる旅行日記を公にする⁽⁵⁾と自序から筆を起し、大正四年五月八日から七月五日までの紀行文の体裁をとって書かれている。筆者自らも断っているように、本書は、単なる紀行文ではなく、ボルネオ批判の書、もしくはボルネオ年鑑ともみなせる。と言うのもすべての事柄にわたって数値をあげて、客観的に叙述していく方法で書かれているからである。著者が「邦人の知らんことを欲すと認める必要事項、殊に其の移民及び産業状態等は大綱漏らさず網羅して居る⁽⁶⁾」と自負するだけあって、わずかな期間に北ボルネオの産業の現状から歴史、地勢、国民性にいたるまで詳細をきわめて叙述している。「南進論」の一系譜として読むよりも無名の民がボルネオという地を、偏見もたぶんに交えながら書いた記録として考えるのが妥当であろう。そしてこの無名の民の声――残念ながらその声の大部分は消え去ってしまっているが――こそ明治期南進論を支えた大きな原動力であった。

おそらく移民の手引き書として書かれたためか、現地の生活、土地、農林業、産業などに関するデータが詳しすぎるほどの数値でもって追究されている。本書を特徴づけている側面は、おそらくラジャ・ブルックを日本に紹介した、もっとも初期の文献のひとつということではあるまいか。彼の波乱に満ちた前半生とサラワクでの活躍、ラジャ称号の授与などからサラワク王国が大英帝国の保護国に

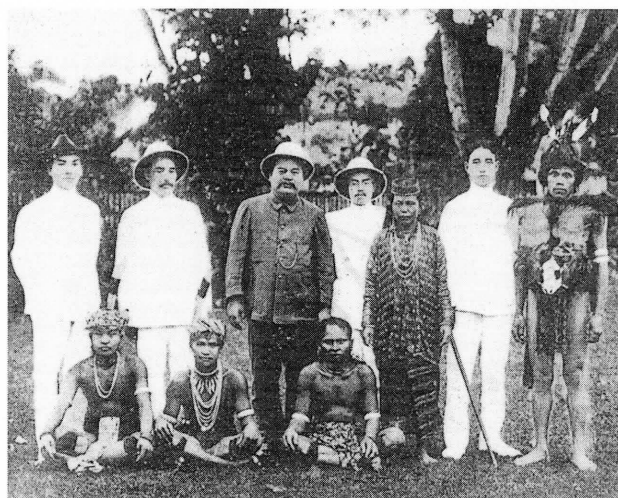


図 11 依岡省三、サラワク視察団とイバン族

なるまでのホワイト・ラジャ「白人の君主」について、一〇ページ近くも割いて詳説しているのである。ジェームズ・ブルックの業績に感動し、胸が熱くなり、感ここに極まったのか、「男子会心の偉拳真に仰恭するに足るものがある」⁽³³⁾と憧憬の念をかくそうともしない。北ボルネオへ移民せんとする自分自身と、その地で英雄となつたラジャを重ね合わせて、感激したのであろう。

ブルック支配下における「現状」について記されている一節で、もっとも印象深いことは、「全く開闢以来斧の入ったことなき鬱蒼

たる森林」と「蠢々たる未開蛮人」⁽³⁴⁾に言及しているところであろう。未開蛮人という言葉に植民地主義の鍵語をみるのは容易であらう。が、そうした言説への批判は、あえてここでは検討せずに先に進もう。

本書には森林を伐採して土地開発するとき、英国政府の特許条件がほぼ一五項目にわたって記述されているが、そのなかに「奴隷の使用を禁じ、其の住民には信教の自由を与え、且つ習慣を尊重すべし」⁽³⁵⁾と特記している箇所注目せねばなるまい。とはいえ、少なくとも疑問符をつけざるを得ないのではなからうか。

三穂五郎が英国領北ボルネオを視察報告する六年前、明治四三年（一九一〇）に鈴木商店の金子直吉（慶応二年—昭和一九年）の命を受け、依岡省三は、ゴム栽培調査のため、ラジャ・サラワク号でクチンに到着し、駐日英国大使グリーンとシンガポール総督の紹介状をたずさえ、サラワク政庁を訪問した。チャールズ・ブルックは不在であったが、知事カルデットと会談し、ゴム園三三エーカー、ローバン河畔の土地一〇〇〇〇エーカーの租借を願ひ出た。翌年、依岡省三は病のために逝去してしまうが、このときからサラワク政庁と鈴木商店の間に固い絆が生じるのである。外国企業に対する租借は英国企業一社を除き、まったく認めなかったサラワク政庁が、さらにその翌年、一〇〇〇エーカー（サマラハン農園）とゴム園三三エーカーの租借認可を鈴木商店に下している。認可された企業が

一〇社に満たないというのに、例外的な、かなりの優遇措置と言わねばなるまい。サラワク自主独立のうえで、ジェームズ・ブルックが先住民に開拓・開墾の権利を保有させ、土地、森林、鉱山などを国有化し、資本主義企業の独占を拒否した政策は注目に値しよう。

租借許可が下りた翌年、すなわち明治四五年（一九一二）に日沙商会クチン支店が開設されたことを忘れてはならない。もうすでにこの段階でミッシヨナリー活動は経済政策より冷遇されている、というより無視されているといつてよい。

日沙商会はサラワク政庁と日本の関係を語るうえで欠くことのできない存在であるゆえ、ここで詳述しておこう。

日沙商会は、明治四三年（一九一〇）に依岡省三がサラワク視察後にゴム栽培を興し、金子直吉から全幅の信頼をえて、創立されたのであった。依岡は若くして病に倒れるが、金子と依岡は一年足らずの交流のうちわずか三回しか会っていないというのに、年長の金子にとって依岡は「偉大な人物」に映った。依岡が金子をして最上級の形容詞を吐露せしめたのは、その冒険精神ゆえであった。

同君（依岡）の為人は、近代の人士が金銭を愛好し、しきりに財産の増殖に熱中するのと同じように、人煙稀れる離れ島や不毛の山野を開拓し、領土の拡張を図ることが三度の飯より

も好きで、これがために所謂生命を鴻毛より軽んずるの気概あり、いかほど危険な仕事でも平気で一身を投ずる志をもつていた。⁽⁵⁶⁾

と、金子は亡き依岡に頌歌をささげ「無名の豪傑」と喝破している。冒険者ジェームズ・ブルックと酷似している点を看過すべきでないだろう。

が、金子が依岡に寄せる熱い想いを分析するとき、ここでも経済政策とミッシヨナリー活動は水と油の関係ではなく、ほぼ軌を一にしている事実が浮かび上がってくる（例えば、再び言及することになるが、冒険家ミッシヨナリーであったリヴィングストンの活動を想起しておくのも無駄ではあるまい）。

日沙商会は鈴木商店のボルネオにおける拠点となり、ゴム栽培、石炭採掘を中心に事業展開していく。後年、日沙商会はボルネオ産業株式会社と拡大発展していくが、ここで見落としてはならないのは、金子直吉という人物である。金子は、ゴム、煙草、砂糖、樟腦、造船、鉄鋼などの七〇社以上の企業を傘下にもつコングロマリットとして急成長を遂げた鈴木商店を代表する社員である。金子は、サラワクに対して「図南の雄志」を抱きながらも夭折した依岡に全幅の信頼をおき、愛していた。つまり金子は「知情意を智仁勇に置き換えて」いく、という意味での植民地主義者でもあった。



図 12 金子直吉

『依岡省三傳』に序文を寄せた金子は、そのなかでその業績に言及しつつ、

日本は天然資源の少ない国である。そして人口はだんだん繁殖している。今日までの日本人としては武断主義に依って、新しい領土を求めると云うことを策してきたのであるが、もう今日ではそれは時代が許さぬ。平和主義で植民地をこしらえねばならぬ。そしてその産物を自分の国に持って帰って、物資の足らぬところを補給するか、またはその産物を売り払ってしまつて、国際経済の決済の一部に充当する。この二つの他にはないのである。⁽⁴⁷⁾

と、自己の植民地経済論を披瀝するのだが、この信条に注目しなければなるまい。というのも、「教師を増発し、唯是日本語の普及を計る事」などをうたう、南洋占領諸島の処遇について省察を加えようとする志賀重昂、田口卯吉などの「南進論」⁽⁴⁸⁾を想起させるばかりか、先述したジェームズ・ブルックの政策と同じだからである。

別の『依岡省三傳』は、岡成志が編纂し、日沙商会刊行会から出版された。⁽⁴⁹⁾ 商会の創立者を顕彰するのは、企業としては当然である。しかし、この伝記は、財界人の伝記にはまずありえない、きわめて印象深い側面をもっている。と言うのも本書の三分の一が伝記の対象者とは直接関係がないサラワク王国史について、しかも三代にわたるラジャ・ブルックについての詳述に割かれているからだ。だが、編者の判断によれば、両者は無関係ではない、むしろ一対にして語らねば全貌が把握できない——「依岡省三の事業を創めたサラワク王国とは如何なる国か。それは、この依岡省三傳と離るべからざることである」⁽⁵⁰⁾——という。そしてここで両者の紹介を逸したら、日本人にサラワク王国を紹介する機会は絶無であろう、とまで言い切る。ここまで断言する根拠はどこから生じるのであろうか。それは両者の親密な信頼関係によるのであろう。「日沙商会はまさしくラジャの依岡省三に対する絶大なる信頼によって、着々事業を拡充しつつあるものである」と明言している。実際、ラジャ・ブルックについて書かれた日本人による記録で、当時、これを凌ぐ文献はない。

歴史的資料的価値を高めているのは、正確な歴史記述・叙述である。記述に信憑性加わるほど、依岡、日沙商会「ラジャ・ブルック」の關係が何よりも緻密かつ雄弁に語りかけてくるのである。「不幸なるダヤク」「イバン」族の救済」をジェームズ・ブルックはサラワク統治方針の一大項目にかかげたが、経済活動に付随してくる、こうしたミッシヨナリー活動の側面は、意識していたかどうかは別にして、ミッシヨナリー活動と経済政策とが不即不離の關係にあったという事実を示唆している。後年、昭和十二年（一九二二）、サラワク政庁は、日沙商会のサマラハン農園に対して三六〇〇エーカーの租借権を、九十九年間にわたり与えている。

依岡省三は「平和主義で植民地をこしらえねばならぬ」⁽⁶¹⁾と提言するのである。サラワクにおけるゴム栽培を「平和事業」と認識した。とはいえ、その開発に精進することを、唯一の目的としているのは、経済活動という美名のかげに隠れた植民地政策に他ならないのである。どのような視座から考えても「平和主義」と「植民地」というふたつの言葉は相容れないからだ。ここに日沙商会のミッシヨナリー活動の裏に蠢く野望を垣間見ることができるのである。『金子直吉傳』には「営利を超越して国家のため、大和民族のために『平和主義で植民地を求める』と言う彼の抱負も尋常ではないが、それを調査せしめ、実行せしめた金子翁もまた傑物である」⁽⁶²⁾と賞賛の声を惜しみなくあげるが、植民地主義を正当化する言辭でしかない。



図13 ラジャと日沙商会幹部

サラワク政庁と鈴木商店がもつとも絆を強化するのは、会社が経営危機に直面していた難局と言うよりもむしろ、逆に破綻寸前であったため、穿った見方をすれば、最後の延命措置としてラジャ・ブルックに援助を申し出ようとした時かもしれない。ヴァイナー・ブルックを日本へ招待した時期、つまり昭和四年（一九二九）であろう。⁽⁶³⁾ラジャ夫妻の来日はすべて日沙商会が立案・設定し、国内旅行を敢行した。故・省三の娘婿である依岡省輔とラジャの間でかわされた最大の話題は、農業政策に苦慮していたサラワクへの、日本人農民移住の件であった。両者間で、その一件について、合意を見たのは言うまでもなからう。三年後には百名以上の米作移民が同地に入植した。さらにラジャはサラワクに埋蔵されている金鉱、アンチ



図 14 田宮嘉右衛門

モニー、鉄、石炭などの鉱物資源開発も日沙商會に一任した。

植民地政策とキリスト教の文脈のなかで日沙商會の依岡に加えて、鈴木商店の傘下にある神戸製鋼所の創業者、田宮嘉右衛門（昭和八年―同三四年）も対象にし、ミッショナリー活動問題Ⅱ重商政策の課題を鮮明にしておきたい。田宮は、金子と初対面のとき、大実業家だから広大な邸宅に住んでいるだろうと予想していた。が、予想は見事に外れたのである。金子の質素さを越えたわびしい住居を見て「その清廉、質素さに威圧をさえ感じた」⁽⁶⁴⁾。やがて田宮は金子直吉の知遇を得て、信頼を深め、鈴木商店に入社することになる（明治四三年「一九一〇」）。

当時、金子は二九歳になったばかりであったが、社長鈴木岩治郎が病没し（明治二七年「一八九四」）、鈴木商店の経営に大きく参画することとなる。樟脳の取引から鈴木商店は倒産寸前まで傾いて行

くが、金子の尽力により倒産を回避したばかりか、これを契機に鈴木商店の礎が堅固に築かれていくのである。金子二九歳、田宮にいたってはまだ一八歳であった。

田宮が金子から依岡省輔を紹介され、神戸製鋼所は艦船や兵器の製造について海軍と折衝を始めたのであった。以後、鈴木商店と海軍は強力な紐帯で結ばれることになる。よって第一次大戦の前後、鈴木商店は飛躍的な業績の展開を見せるのである。軍需産業への本格的な参入と言ってよい。軍需産業との関係は、田宮のなかで伏流となつて、敗戦後にも「南方経済研究会」の顧問に就任し⁽⁶⁵⁾、挫折した南方進出の夢を再度見ようとしたのであろうか。

が、ここでも田宮自身のなかに、宗教と経済の二律背反をみることになる。彼は日本基督教会に所属する神港教会で受洗した、篤実・敬虔なキリスト教徒であった。すでに明治四〇年（一九〇七）、キリスト教に入信していた。田宮自身は「キリストの教えをそのまま実行できる信者になれるとは思わなかった」⁽⁶⁶⁾と述懐している。当初は実業界の厳しさ・艱難から逃れる、精神の安らぎの場を求めていただけであった。「ただ救いにあずかりキリストの教えに少しでも近づくことによって、心の苦悩を和らげることができたらしいのが望みであった」と率直に信仰心を告白している。「コリント人への手紙」五章一節――「私たちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない

永遠の家が備えてあることを、私たちは知っている——をいつも愛誦していたという。⁽⁶⁷⁾この一節を口ずさみながら南方に拡大していく戦禍には、その想いは至らなかったのであるうか。終末という想念が去ることはなかったのか。ここに田宮のなかにラジャ・ブルックと同質な資質を見出すことができよう。

田宮に「宗教と祖国再建」(一九四七)と題する一文がある。大東亜戦争も軍首脳部にキリスト教徒が多くいたら惨劇は避けられたであろうと、文を起こし、平和国家再建の礎は、キリスト教信仰におき、進んでいかねばならないと警鐘を鳴らす。「人道的な相互扶助博愛の精神」⁽⁶⁸⁾を謳うキリスト教を心の支えとして、国家を再建せよ、と提唱するのである。たえず田宮は「人間は自己を知らねばならぬ」⁽⁶⁹⁾と反芻していたそうだが、この言辞こそ自分自身に問いかけていた反問であったかもしれない。「田宮さんは聖書のうちに、罪の赦しと永遠の生命——天国の望みとなくさめを見出したキリスト教徒です」⁽⁷⁰⁾とは、神港教会、田中剛二牧師の述懐である。田宮自身の「罪」とは何か、そしてまた何に対する「赦し」であったのであろうか。

結びにかえて

資源に乏しい、人口密度の高い国は、海洋に向けて、その経済を膨張させざるを得ない、という一般論は、日本の場合、明治期の南進論から大東亜共栄圏、南方共栄圏にいたるまで合致する。明治期

の南進論はきわめて脆弱な一側面を有していた。⁽⁷¹⁾それは時局的な要請から強いられる歪曲、作為により「独自」の論が立てられていたからであろう。実相を殺ぎ取ったところから、夢の代償作用であるロマンティズムが生まれてくるのは否めない——「南へ、南へ。ボルネオは日本青年の希望であり、雄飛すべき天与の新天地である」⁽⁷²⁾。

しかし、しょせん夢は夢にすぎず、現実を超えることはできないのである。現実のなかで機能しなければ、未開発地域から、少しでも経済的収奪でもって現実の利益を希求しようとするのは、自然な行為である。サラワク開発の先駆者を見る時、本論でも言及した無名の民、そして日本で生活に逼迫した下層民の労働力を無視して語ることはできない。その一方で、南進した人々の特徴を「おしなべて三流以下の日本人あるいは落ちこぼれ人種」⁽⁷³⁾と断言してしまうのは早計にすぎよう。サラワク政庁と日沙商会の関係を考えても、無名の民がいかに経済的支柱になりえたか、を証明している。その意味で、ミッショナリー活動が経済政策と雁行するのも当然である、と結論づけてもよい。

しかし、これまで論じてきた問題は、サラワクという一地域のみに限定すべき問題ではないのである。結論から言えば、突きつけられているこの課題は、先例なき文化事象であるという見解と、文明伸展の一過程であり相貌を変えた資本主義に過ぎないという見解に

引き裂かれ宙吊り状態のまま袋小路に追い詰められたグローバリゼーションという現象が発している問いと何ら変わらないのである。⁽⁷⁾

注

- (1) H. F. Wilson (ed.), *Builders of Greater Britain* (London : T. Fisher Unwin, 1897-).
- (2) Thov who of /Thy grace/ didst build up this/ Brittanick Empire/ to a glorious and/ enviable height, with/ all her daughter/ lands about her./ stay vs in this/ felicitie.
- (3) Spenser St. John, *Rajah Brooke : The Englishman as Ruler of an Eastern State*, (London : T. Fisher Unwin, 1899), pp. xvi-xvii.
- (4) Sir Francis Grant (1803-78) は、ロイヤル・アカデミーの会長 (1866-78) で、当時の著名人を多く描いた。ブルックの肖像画がナシヨナル・ポートレート・ギャラリーに寄贈される経緯については、セント・ジョンの前掲書 (p. xviii) に詳述されている。また、グラントを紹介する『シホームズ・ブルック伝』の執筆交遊については、R. H. W. Reece, "Introduction" to *The Life of Sir James Brooke*, (Kuala Lumpur : Oxford University Press : 1994), p. vii. に言及されている。
- (5) 図1を参照すると両者の類似点、と言うよりもブルックがバイ

ロン卿に対して意識的であったことは、明瞭である。

- (6) この両者の比較は検討に値する。アフリカ大陸の探險家は、奴隷制度の撤廃を主張したが、生前にはそれは実現しなかった。その意味でミッシヨナリーとしては失敗したこと、また探險家としてはザンベジ川をナイルの源流と誤解したことなどを批判の対象として挙げる事ができる。ブルックも、ミッシヨナリー探險家として、それとはほぼ相似形をなす無理解、誤解をおかした。それでも前者がアフリカ大陸を横断し、ナイヤガラ瀑布を発見した、最初のヨーロッパ人であるのに対して、後者は、規模の点でやや縮小したものとみなされるが、同様な業績をなし遂げた。この両者に共通するのは、超人的な意志力、それ以上にアフリカ、サラワクの人々にそそぐ愛情ではなからうか。

- (7) オーエン・ラッターの著述 (Owen Rutter, *Triumphant Piracy*, (London : Harper, 1937) がその間の事情を説いている。
- (8) ブルックの海賊討伐については、同時代に出版されたブルック伝、ボルネオ探險記に散見されるように、やや誇張された側面があるが、ステイヴン・ランシマンの著述 (Steven Runciman, *The White Rajahs : A History of Sarawak from 1841 to 1946*, [Cambridge : Cambridge University Press, 1960])、ラッターの紀行記 (Owen Rutter, *The Pirate Wind : Tales of the Sea-Robbers of Malaya*, [London: Hutchinson, 1930]) などには信頼するに足る史料である。
- (9) この言説―冒険心、大海原での孤独、精神にひそむ原初本能、自然との死闘、人間の限界を揺さぶる葛藤のドラマ―こそイギリ

ス海洋文学のトポスといつてよい。

- (10) こうした英雄伝がもつとも感化力をもつのは、指摘するまでもなく青少年の読者層である。英雄伝説が孕む大人の幼児性は植民地主義者の心性と共通している。先駆者は、この領域であれ、崇拜の対象に高められていく。ケップルのシジャム(Henry Koppel, *The Expedition to Borneo of H. M. S Dido for the Suppression of Piracy: With Extracts from the Journal of James Brooke, Esq., of Sarawak*, 2vols, (New York: Harper & Brothers, 1846) を子供向けに焼きなおした「サラワクのサー・ジェームズ・ブルックがなし遂げた偉業を物語る『ホワイター・シジャム』は、ブルックと他民族の戦闘場面と外交交渉で埋め尽くされている。これを読む年少者は、愛国心を鼓舞されて当然である。Eric Wood, "White Rajah: The Pioneer Work of Sir James Brooke, of Sarawak, The Boy's Book of Pioneers (London: Cassell, 1916), pp. 75-100).
- (11) Sir Rodney Mundy, *Narrative of Events in Borneo and Celebes, down to The Occupation of Labuan; From the Journals of James Brooke, Esq., I*, (London: John Murray, 1848), p. 271.
- (12) ハの儀式とくしは、I・D・マレーン(J. Derek Freeman, *Report on the Iban of Sarawak*, 2vols in one [Kuching: Government Printing Office, 1955]) の文献が水準的研究と考えられているが、文化人類学的方法論について時代的な制約があったにせよ、イバン族と共同生活を体験し、考察した、小倉清太郎の研究『首狩人種の打診』[南光社、一九三三]、『ボルネオ紀行』

〔敵傍書房、一九四一〕は、高く評価されてよい。とりわけ前記の「ダイヤ」「イバン」の部落を覗く」の章を参照せよ。

- (13) Graham Saunders, *Bishops and Brookes: The Anglican Mission and the Brooke Rajah in Sarawak, 1841-1941*, (Singapore: Oxford University Press, 1992), pp. 114-18.
- (14) *Ibid.*, pp. 1-18.
- (15) Richard Altick, "Religious Movements and Crises," *Victorian People and Ideas*, (London: J. M. Dent), pp. 203-37.
- (16) G. Saunders, *op. cit.*, p. 3 and pp. 9-11.
- (17) R. H. W. Reece and A. J. M. Saint, *Introduction to Sketches of Our Life at Sarawak by Henriette McDougall*, (Singapore: Oxford University Press, 1992), pp. xxxvi-vii.
- (18) John Templer (ed.), *The Private Letters of Sir James Brooke, K. C. B., I* (London: Richard Bentley, 1853), p. 78.
- (19) Owen Rutter (ed.), *Rajah Brooke and Baroness Burdett Coutts: Consisting of the Letters from Sir James Brooke, first White Rajah of Sarawak, to Miss Angela (afterwards Baroness) Burdett Coutts, with Foreword by Her Highness the Rane Margaret of Sarawak*, (London: Hutchinson, 1935).
- (20) Clara Burdett Patterson, *Angela Burdett-Coutts and the Victorians*, (London: John Murray, 1953), p. 187.
- (21) Steven Runciman, *op. cit.*, p. 89.
- (22) *The Times* (2 April, 1850, 22 April, 1850, 5 June, 1851, 11 July, 1851).

- (23) *The Times* (8 November, 1858, 23 November, 1858, 8 December, 1858) [Parliamentary Proceedings — Case of Sir James Brooke, (29 April, 1857)].
- (24) Steven Runciman, *op. cit.*, p. 50, p. 135, pp. 136-38.
- (25) *Rajah Brooke and Baroness Burdett Coutts*, pp. 286-87 and p. 297.
- (26) *Ibid.*, pp. 71-72.
- (27) *Ibid.*, p. 109.
- (28) 彼女は、チャールズ・ブルックとともにサラワク政策に関与しつゝ。 *Ibid.*, pp. 64-66, p. 210 and p. 284.
- (29) *Ibid.*, p. 209.
- (30) *Ibid.*, p. 155.
- (31) 本章の記述の多くは、Charles Brooke, *Ten Years in Sarawak with a Transcription of the Journal of Charles Brooke September 1866-July 1868 and an Introduction by H. W. Reece*, (Singapore : 1990) に依拠している。
- (32) Robert Pringle, *Rajahs and Rebels : The Ikans of Sarawak under Brooke Rule 1841-1941*, (New York : Cornell University Press, 1970), pp. 404-5.
- (33) 林今吉「典型の宝庫サンギル島の開発（殉教の牧師）」、『植民』（昭和三年六月号）四五—四六頁。
- (34) 同書、四六頁。
- (35) 同書、四六頁。
- (36) Vernon L. Porritt, *British Colonial Rule in Sarawak 1946-1963*, (Singapore : Oxford University Press, 1997), pp. 51-2 and pp. 158-59. 及び Bob Reece, *Masa Jepun : Sarawak under the Japanese 1941-1945*, (Malaysia : Sarawak Literary Society, n. d. [1998]) は、数少ない例外である。
- (37) *The Times*, 20 February, 1942.
- (38) この議論については、キース・トマス [Keith Thomas] (中島俊郎編訳)、『歴史と文学』『歴史と文学——近代イギリス史論集』（みすず書房、二〇〇一年）、五一—四〇頁を参照せよ。
- (39) アグネス・キース（山崎晴一訳）『三人は帰った』（岡倉書房新社、昭和二十七年）一—二頁。Agnes Newton Keith, *Three Came Home*, (Boston : Little Brown, 1947) も参照した。
- (40) 同書、八四頁。
- (41) 同書、一一一—一二頁。
- (42) 同書、一二五—二六頁。
- (43) 同書、一三八頁。
- (44) 同書、二六四頁。
- (45) 同書、三四九頁。
- (46) 同書、三五五頁。
- (47) 主人公はスガ大佐を戦争という極限状況におかれた人間のアンビバレントな実像であると考えている。
- (48) 原誠「日本軍政とインドネシアのキリスト教」倉沢愛子編『東南アジア史のなかの日本占領』（早稲田大学出版部、二〇〇一年）二〇—二二頁を参照せよ。
- (49) Mrs E. R. Pitman, *Lady Missionaries in Foreign Lands*,

(London: S. W. Partridge, 1906), pp. v-x.

- (50) 志賀重昂『南洋占領諸島の処置』『日本一』(大正七年四月号)
- (51) 三穂五郎『自叙』『邦人新發展地としての北ボルネオ』(東京堂書店、大正五年)、一頁。初出は「英領英ボルネオ事情一斑」『南洋協会々報』第二卷第三号(大正五年三月)一—四八頁である。
- (52) 同書、二頁。
- (53) 同書、一六頁。
- (54) 同書、五六頁。
- (55) 同書、五七頁。
- (56) 金子直吉「序」岡成志編述『依岡省三傳』(日沙商会刊行会、昭和十一年)、二頁。
- (57) 金子柳田両翁頌徳会『金子直吉伝』(金子柳田両翁頌徳会、昭和二年)二五八頁。なお金子直吉については、城山三郎『風—鈴木商店焼き討ち事件』(文芸春秋社、昭和四一年)、「金子直吉と大正の企業家精神」『近代日本を創った人 上』(毎日新聞社、昭和四〇年)一四九—一五五頁、藤本光城『松方・金子物語』(兵庫新聞社、昭和三五年)などの文献が、実業家としての全体像を呈示してくれる。また柳田義一編『金子直吉遺芳集』(非売品、昭和四七年)は、実業家金子とは異なる人間像に迫っている。
- (58) 田口卯吉『南洋計略論』『東京経済雑誌』(明治三三年三月号)、三五—三五三頁。
- (59) 依岡省三の伝記には前掲書の他に、浅岡重喜編『故依岡省三君追憶』(依岡神社奉祭会、一九二〇年)及び大関雄只編『続南嶋余芳—故依岡省三君十五周年追憶録』(非売品、一九二六年)などの

文献がある。

- (60) 岡成志編述『依岡省三傳』、一〇五頁。
- (61) 『金子直吉伝』、二五九頁。
- (62) 同書、二五九頁。ここには両者の植民地論がいかんなく吐露されているが、金子直吉がサラワク、レジャン河のアルミナ製造計画を絶筆のなかで言及している事実は、日沙商会とサラワク政庁の関係を如実に示すものである。
- (63) 図13は、両者の親密度を雄弁に伝えている。
- (64) 田宮記念事業会『田宮嘉右衛門伝』(田宮記念事業会、昭和三七一年)、三一頁。
- (65) 同書、二八四—二八五頁。
- (66) 同書、六〇頁。
- (67) 同書、三〇五—三〇六頁。
- (68) 同書、三〇九頁。
- (69) 同書、三〇九頁。
- (70) 同書、三一〇頁。
- (71) 「南進論」については、矢野暢編講座東南アジア学第十卷『東南アジアと日本』(弘文堂、平成三年)所収の諸論考が総括となっている。
- (72) 松本辰蔵『南洋ボルネオ島 サラワク王国の邦人』『植民』(昭和四年二月号)四六—四八頁。筆者は多年、サラワク日沙商会の駐在員であっただけに、貴重な証言に満ちている。
- (73) 矢野暢『近代日本における南進の論理』、『中央公論』(昭和四九年一月号)、一二五頁。

- (74) Arjun Appadurai (ed.), *Globalization*, (Durham : Duke University Press, 2001) 所収の諸論考を参照せよ。